

オンライン大学生の卒業後の変化と満足度との関係[†]

田中理恵子^{*1}・向後 千春^{*2}

早稲田大学大学院人間科学研究科^{*1}・早稲田大学人間科学学術院^{*2}

オンライン大学を卒業した社会人を対象として、“入学して良かったこと”、“入学して大変だったこと”や、“卒業後自分自身に与えた影響”について調査した。その結果、オンライン大学に在学したことの評価は、在学中の“学友との交流”と卒業後に“思考力とスキル”が身についたことが規定要因であることが明らかになった。また、“思考力とスキル”は“書くことの困難さ”を体験することで達成されると同時に“論文指導”も影響を与えることが明らかになった。さらに、在学中に、“時間管理の困難さ”を経験することによって時間管理のスキルが鍛えられ、卒業後の“仕事とキャリア”に影響を与えることが明らかになった。

キーワード：オンライン大学，生涯学習，eラーニング，社会人学生，卒業後調査

1. はじめに

近年，日本では生涯学習社会の構築に向け，社会人が多様な選択を可能にする教育や学習の機会を享受することができるような制度改革を進めている。これらの整備によって，従来型の大学における社会人への開放化がされ，大学や大学院への社会人学生が増加している。その中でも，通信制大学・大学院数が，ともに増加傾向にある（文部科学省 2009）。平成25年度学校基本調査によると，平成20年から5年間は，全国の大学生及び大学院生のうち，社会人が占める割合は20%であった。これは，平成25年度には約22%と上昇している（文部科学省 2013）。さらに，リカレント教育に対する社会人の関心は高く，約50%の人が大学院，約20%の人が大学を利用したいと考えている（文部科学省 2009）。

オンライン大学の社会人学生の入学動機を調査した結果によると，“可能性と挑戦”，“友人と人脈”，“仕事と専門”が入学動機となっていた（田中・向後 2013）。

もし，在学中にこうした目的が果たされていたのであれば，卒業後の満足度も高いはずである。

そこで，本研究では，オンライン大学を卒業した社会人学生を対象に，入学して良かったこと，入学して大変だったことを回顧的に評価してもらい，それが卒業後の自分自身にどのような影響を与えているかについて明らかにし，これらが卒業後の満足度にどう影響しているかを検討することを目的とした。

2. 方 法

2.1. 調査の流れ

都市部近郊にあるeラーニング授業を中心としたオンライン大学（以下「eスクール」と呼ぶ）を2007年～2013年に卒業した社会人学生753名を対象として調査を行った。回答期間は2013年6月1日～6月30日（30日間）であった。回答は大学の学習管理システムのアンケート機能を用いて無記名で行った。

2.2. 質問項目の作成

関・向後（2012a）の調査において，M-GTA分析による，社会人学生の大学在学時の学業継続要因と阻害要因について抽出された結果を参考に“入学して良かったこと”の14項目を作成した。選択肢は“1.まったく良くなかった”から“5.とても良かった”の5件法であった。同様に“入学して大変だったこと”の6項目を作成した。選択肢は“1.まったく大変ではなかった”から“5.非常に大変だった”の5件法であった。

つぎに，関・向後（2012b）の調査において，M-GTA

2014年4月1日受理

[†] Rieko TANAKA ^{*1} and Chiharu KOGO ^{*2} : The Relationship between Student Satisfaction and Changes after Graduation of an Online University

^{*1} Graduate School of Human Sciences, Waseda University, 2-579-15, Mikajima, Tokorozawa, Saitama, 359-1192, Japan

^{*2} Faculty of Human Sciences, Waseda University, 2-579-15, Mikajima, Tokorozawa, Saitama, 359-1192, Japan

分析による、社会人学生の卒業後の意識変容の分析について抽出された結果を参考に、“卒業後の自分自身に与えた影響”の9項目を作成した。選択肢は“1.まったく影響がなかった”から“5.非常に影響があった”の5件法であった。

また、e スクールで学んだことの満足度を評価する項目として、“e スクール入学を他の方に勧めたいか”を設定した。選択肢は“1.まったく勧めたくない”から“5.とても勧めたい”の5件法であった。

さらに、属性項目として、所属学科、性別、年齢、勤務形態、家族形態、子どもの有無をたずねた。

3. 結 果

3.1. 回答者の属性

調査の結果、135名の回答を得た（平均47.97歳、 $SD=9.40$ ）。回収率は17.9%であった。回答者の内訳は男性67人、女性68人であった。年齢層では20代が5人、30代が17人、40代が59人、50代が37人、60代が14人、70代以上が3人であった。勤務形態は、フルタイム正規職88人、フルタイム非正規職9人、非常勤13人、主夫・主婦11人、その他14人であった。

3.2. 項目分析

“入学して良かったこと”14項目、“入学して大変だったこと”6項目、“卒業後自分自身に与えた影響”9項目の平均値と分布を確認した。いくつかの項目で得点の偏りが見られたが、いずれの項目も入学動機を把握する上で必要な内容が含まれていると判断し、すべての項目を以後の分析対象とした。

3.3. “入学して良かったこと”の構造

“入学して良かったこと”14項目に対して、IBM SPSS Statistics 21により最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。スクリープロットの急落から2因子を抽出した。因子数を2に固定し、再度因子分析を行った結果、0.40以上の負荷量を示さなかった6項目を分析から除外し、残りの8項目を提示した（表1）。第1因子は5項目で構成されており、“サークルで学友との交流が深まったこと”、“SNSで学友との交流が深まったこと”、“学期ごとに懇親会が開催されていたこと”などが高い負荷量を示していた。そこで、“学友との交流”と命名した。第2因子は3項目で構成されており、“指導教官が論文等の執筆を指導してくれたこと”、“ゼミに入ったこと”などが高い負荷量を示していた。そこで、“論文指導”と命名した。内の整合性を検討するために、下位尺度得点の平均値に

より α 係数を算出したところ、“学友との交流”で $\alpha=.78$ 、“論文指導”で $\alpha=.68$ であった。

3.4. “入学して大変だったこと”の構造

“大学に入って大変だったこと”6項目に対して、同様に探索的因子分析を行った。スクリープロットの急落から2因子を抽出した。因子数を2に固定し、再度因子分析を行った結果、0.40以上の負荷量を示さなかった1項目を除外し、残りの5項目を提示した（表2）。第1因子は3項目で構成されており、“睡眠時間が足りなかったこと”、“仕事や家庭との両立をすること”が高い負荷量を示していた。そこで、“時間管理の困難さ”と命名した。第2因子は2項目で構成されており、“レポートを書くこと”、“卒業論文を書くこと”が高い負荷量を示していた。そこで、“書くことの困難さ”と命名した。 α 係数は、“時間管理の困難さ”で $\alpha=.83$ 、“書くことの困難さ”で $\alpha=.76$ であった。

3.5. “卒業後自分自身に与えた影響”の構造

“卒業後自分自身に与えた影響”9項目に対して、同様に探索的因子分析を行った。スクリープロットの急落から2因子を抽出した。因子数を2に固定し、再度因子分析を行った結果、0.40以上の負荷量を示さなかった2項目を除外し、残りの7項目を提示した（表3）。第1因子は5項目で構成されており、“論理的思考力”、“研究的能力”、“問題解決能力”などに高い負荷量を示していた。そこで、“思考力とスキル”と命名した。第2因子は2項目で構成されており、“自分の仕事の仕方”、“自分のキャリア”といった項目が高い負荷量を示していた。そこで、“仕事とキャリア”と命名した。 α 係数は、“思考力とスキル”で $\alpha=.83$ 、“仕事とキャリア”で $\alpha=.72$ であった。

3.6. 因子間の因果モデル

評定項目から抽出された各因子の下位項目の平均値を下位尺度得点とし、観測変数を作成した。観測変数“学友との交流”、“論文指導”、“時間管理の困難さ”、“書くことの困難さ”、“思考力とスキル”、“仕事とキャリア”から“e スクール入学を他の方に勧めたいか”（以下“e スクール入学を勧めたい”とする）への影響関係を検討するために、共分散構造分析をした。分析にはIBM SPSS Amos 21を用いた。有意でなかったパスを削除し再度分析を行ったところ、適合度指標は、 $\chi^2(13)=11.241$, $GFI=.977$, $AGFI=.951$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$, $AIC=41.241$ となり、高い適合度が得られた。

図1に最終的なモデルを示した。なお、この図では誤差変数を省いている。

本モデルでは“学友との交流”および“思考力とスキル”から“eスクール入学を勧めたい”に対して有意な正の影響が認められた。さらに、“書くことの困難さ”から“思考力とスキル”に対して有意な正の影響が認められた。また、“論文指導”から“思考力とスキル”に対しては、弱いながらも正の影響が認められた。

一方、“時間管理の困難さ”から“仕事とキャリア”に対して有意な正の影響が認められた。

表1 “入学して良かったこと”の因子分析

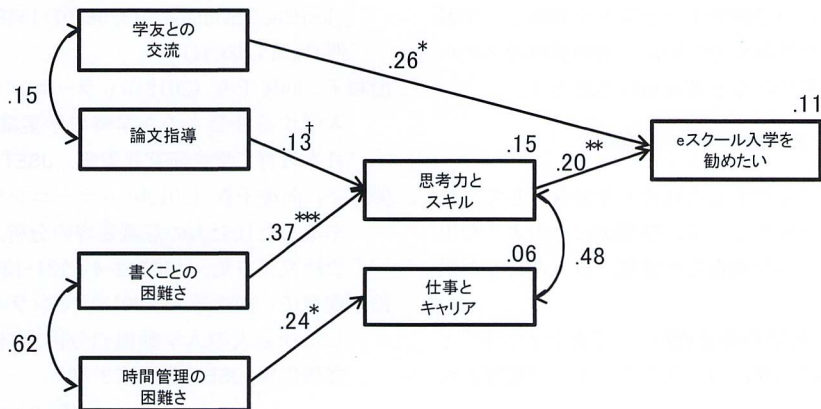
| 項目 | I | II | 平均 | SD |
|--|------|------|------|------|
| 第1因子：学友との交流 ($\alpha=.78$) | | | | |
| 13. サークルで学友との交流が深まったこと | .70 | -.06 | 4.13 | 1.02 |
| 14. SNSで学友との交流が深まったこと | .69 | .06 | 4.23 | .95 |
| 5. 学期ごとに懇親会が開催されていたこと | .68 | -.11 | 4.44 | .80 |
| 6. 懇親会での応援部の応援がよかったこと | .63 | .07 | 4.41 | .80 |
| 7. スクーリングに参加したこと | .55 | .10 | 4.76 | .58 |
| 第2因子：論文指導 ($\alpha=.68$) | | | | |
| 9. 指導教官が論文等の執筆を指導してくれたこと | -.02 | .97 | 4.50 | .83 |
| 8. ゼミに入ったこと | .01 | .63 | 4.79 | .46 |
| 10. 教育コーチが論文等の執筆を指導してくれたこと | .03 | .47 | 4.56 | .86 |
| 因子間相関 | | .18 | | |

表2 “入学して大変だったこと”の因子分析

| 項目 | I | II | 平均 | SD |
|--|------|------|------|------|
| 第1因子：時間管理の困難さ ($\alpha=.83$) | | | | |
| 2. 睡眠時間が足りなかったこと | .83 | -.05 | 3.77 | 1.14 |
| 1. 仕事や家庭との両立をすること | .80 | .03 | 4.03 | 1.01 |
| 3. 勉強時間が足りなかったこと | .63 | .19 | 3.89 | .95 |
| 第2因子：書くことの困難さ ($\alpha=.76$) | | | | |
| 4. レポートを書くこと | -.05 | 1.03 | 3.84 | .93 |
| 5. 卒業論文を書くこと | .26 | .45 | 4.24 | .93 |
| 因子間相関 | | .65 | | |

表3 “卒業後自分自身に与えた影響”の因子分析

| 項目 | I | II | 平均 | SD |
|---|------|------|------|------|
| 第1因子：思考力とスキル ($\alpha=.83$) | | | | |
| 5. 論理的思考力 | .76 | .13 | 4.10 | .84 |
| 4. 研究的能力 | .74 | .03 | 4.06 | .79 |
| 3. 問題解決能力 | .73 | .20 | 3.89 | .87 |
| 7. 文章作成力 | .68 | .01 | 4.03 | .89 |
| 6. パソコンスキル | .62 | -.20 | 3.45 | 1.23 |
| 第2因子：仕事とキャリア ($\alpha=.72$) | | | | |
| 1. 自分の仕事の仕方 | -.17 | 1.09 | 3.73 | 1.05 |
| 2. 自分のキャリア | .16 | .49 | 3.35 | 1.15 |
| 因子間相関 | | .59 | | |



($\chi^2(13)=11.241$, GFI=.977, AGFI=.951, CFI=1.00, RMSEA=.00 有意なパスのみ表示)

図1 因子間の因果モデル

4. 考 察

因果モデルより、“学友との交流”を良かったと評定した人は、卒業後、“e スクール入学を勧めたい”と考えている。普段、オンデマンド授業を受講している社会人学生にとって、実際に大学に通学することは少ない。しかし、調査対象のオンライン大学では、スクーリング、ゼミといった“学友との交流”の機会がある。一方、学友とは、情報交換や同じ目標を持つ仲間として互いを高め合い、励まし合うような精神的な支援者となりうる。これらは、オンライン大学でも、学生同士の交流の場が重要であるということを示唆している。

また、卒業後に“思考力とスキル”に影響があったと考えている人は、“e スクール入学を勧めたい”と考えている。大学での学びとは、自分の興味のあるテーマを選択し、学術的知識を得たり、考えたことを論理的に表現したりすることである。このような能力を身につけたと考えている人は大学を高く評価していることが明らかになった。

さらに、卒業後の“思考力とスキル”への影響は、学生自身が論文作成の過程のなかで、“書くことの困難さ”を体験しながら、論理的な思考力とスキルが鍛えられることで達成される。同時に、ゼミにおける指導教員からの“論文指導”を良かったと感じていることも示唆された。

卒業後の“仕事とキャリア”への影響は“時間管理の困難さ”を感じていることによるものとわかった。社会人学生が仕事や家庭での役割を維持しながら、学生としての生活を続けるには時間的制約がかかる。限られた生活時間の中で優先すべきものを判断し、学習するための時間を確保するために、時間管理のスキルが鍛えられた結果であると考えられるだろう。

5. 結 論

オンライン大学を卒業した社会人を対象として、社会人になって学び直すことが、卒業後にどのような影響を与えているのかを調査した結果、以下のことが明らかになった。

(1)オンライン大学の満足度は、“学友との交流”と“思考力とスキル”が身についたことによって規定される。

(2)“思考力とスキル”は“書くことの困難さ”を体験することで達成されると同時に“論文指導”も影響を与える。

(3)在学中に、“時間管理の困難さ”を経験することで時間管理のスキルが鍛えられ、卒業後の“仕事とキャリア”に影響を与える。

付 記

本研究にご協力くださいました早稲田大学人間科学部通信教育課程卒業生の皆様に心より御礼申し上げます。

本論文の一部は、以下の研究会で発表されました。田中理恵子、向後千春(2014) オンライン大学の学生生活に関する回顧と卒業後の変化。日本教育工学会研究報告集, JSET14-1: 357-364

なお、本研究は平成22-26年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)22500942「成人教育学の視点に基づいた生涯学習のためのeラーニングの構築と実践」による助成を受けています。

参 考 文 献

文部科学省(2009) 大学における社会人の受入れの推進について(参考資料)。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/028/siryu/_jicsFiles/afidfile/2010/03/05/1287479_01.pdf (参照日2014. 03.31)

文部科学省(2013) 学校基本調査—平成25年度(速報)結果の概要—。調査結果の概要(高等教育機関)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/_jicsFiles/afidfile/2013/08/07/1338338_03.pdf (参照日2014. 03.31)

関和子、向後千春(2012a) eラーニング主体の大学に入学する社会人の在学時の学業継続要因の分析。日本教育工学会研究報告集, JSET12-3: 107-114
関和子、向後千春(2012b) eラーニング主体の大学を卒業した社会人の意識変容の分析。日本教育工学会研究報告集, JSET12-4: 131-138

田中理恵子、向後千春(2013) オンライン大学に入学した社会人の入学動機の分析。日本教育工学会研究報告集, JSET13-4: 73-80

(Received April 1, 2011)